第３章 浜松市の歴史文化の特徴

本市の歴史文化の特徴について、地質や文化圏、自然環境が織りなす地域特性、交通、気風などの諸特性とともに、注目すべき文化財の特徴を取り上げ、以下に示す12項目に整理する。

地　質	1　日本列島を二分する地質	文化財の構成要素	7　基層的信仰と多様な民俗芸能
文化圏	2　東西文化圏の交錯地		8　地域の成り立ちを伝える遺跡群
地域特性	3　浜名湖と天竜川が織りなすサト、ヤマ、マチ		9　徳川家康と武田信玄が対峙した攻防の舞台
東西交通	4　東海道と姫街道がもたらす往来のにぎわい		10　連なる古刹と寺宝
南北交通	5　秋葉街道を通じた交流と信仰		11　豊富な名勝庭園
気　風	6　ものづくりに関わる新進の気風		12　都市「浜松」の成り立ちとゆくえ

１　日本列島を二分する地質

本市は、日本列島のほぼ中央に位置し、列島最大の断層・中央構造線に沿い、またフォッサマグナの西側にあって、２つの断層帯に挟まれた三角地帯にあたる。本市域の大半は中央構造線よりも東（南）で、西南日本の外帯にあたるが、天竜区水窪町や佐久間町の一部は中央構造線の西（北）で内帯にあたる。内帯の特徴的な岩石に領家帯があるが、これは水窪町の奥領家という地名がその命名のもとになっている。県境の青崩峠（天竜区、県史跡）から翁川の直線的な谷を経由する構造線は、水窪川との合流地点付近から山地に入りホウジ峠（天竜区、県天然記念物、ただし景観）から佐久間町浦川方面へと次第に西向きに方向を変える。

本市を含む三角地帯は、複数のプレートがぶつかり合う境界に近く、二つの大きな断層以外にも隆起と褶曲により複雑な地形が造られ、断層に沿った深い渓谷が直線的に続き、破砕帯が崩落しやすい露頭を呈している。さらにプレートの衝突による歪みを解消しようとする断層（赤石裂線と光明裂線など）が複雑に錯綜している。このため、二俣川では川の両岸で岩石が異なるなどの景観を形成している。シブカワツツジ（県天然記念物）やギフチョウ（市天然記念物）など特徴的な動植物がみられる蛇紋岩地帯も三角地帯の中に含まれる。

市域の外帯を構成する岩石の多くはもともと海底であったが、フィリピン海プレートの潜り込みによって押し上げられた付加帯にあたる。帯状に分布する石灰岩からアンモナイトをはじめとする貝化石などが産出するのはこのためである。陸化した石灰岩は浸食によって鍾乳洞など独特の景観を造り出している。数万年前にこの地に進出した人類は、鍾乳洞や岩陰を利用しており、その痕跡が見つかっている。日本列島の土壌の多くは土中に古い化石などを長く留めないが、石灰岩はその性質によって人骨や獣骨が長く保存されるため、本州最古の化石人骨とされる浜北人（下層約 18,000 年前、上層約 14,000 年前）やそれに次ぐ時代の三ヶ日人（約 8,000 年前、出土地は只木遺跡）など、他の地層では見つかりにくい化石人骨が発見されているのも地域の特色である。

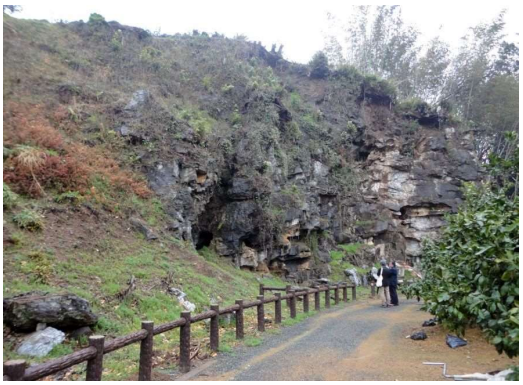

図３－１　只木遺跡

2　東西文化圏の交錯地

浜松市は、東京と大阪のほぼ中間地点にあり、日本列島を二分する西日本的要素と東日本的要素が交錯する地域である。遺跡や出土品等に現れる諸特徴のほか、食文化や方言など、現代の生活文化にも両者が入り混じる様相が見出せる。

本市は、国内有数の銅鐸密集地として知られている。銅鐸は弥生時代の祀りに用いられた大型の青銅器であり、これまでに完形の銅鐸（どうたく）19 口の出土が知られている。これらは、すべて弥生時代後期（約 2,000～1,900 年前）の製作品に限定できる点でも、その集中度は際立っている。弥生時代の日本列島には、銅鐸や銅剣、銅矛といった大型青銅祭器を用いる西日本文化圏と、基本的に大型青銅祭器を用いない東日本文化圏という二大文化圏があったことが知られているが、本市はこのうち、西日本文化圏の東端部に位置している。

食文化においても、本市は東西の様相が混在する。一例として、当地の名物、うなぎを取りあげる。当地でうなぎが特産化するのは明治時代以降のことであり、東京と大阪という二大消費地の中間に位置する本市は、大都市への供給に優位であった。このため本市では、「関東風」、「関西風」と呼ばれる異なる焼き方がみられる。関東風では、うなぎを背開きにし、白焼きにした後、蒸してから再びタレをつけながら焼き上げる。一方、関西風では、うなぎを腹開きにし、直火で白焼きにしたものを蒸さずにタレを付けて一気に焼き上げる。

方言についても類似した特徴が指摘できる。浜松市では、東京系アクセントを持ちながら、独特の言い回しやイントネーションがみられる「遠州弁（えんしゅうべん）」が用いられているが、細かな表現に注目すると東西の様相が混在している。明治 36 年（1903 年）の国語調査委員会の調査による方言東西境界線からは、遠江中心に東西の表現が入り乱れている様相がうかがえる。

図３－２　東西文化の交錯（1:銅鐸の分布、2:前原銅鐸、3:滝峰才四郎谷銅鐸、4:うなぎ蒲焼、5:方言の分布）

３　浜名湖と天竜川が織りなすサト、ヤマ、マチ

本市を特徴づける水域として、浜名湖と天竜川が挙げられる。浜名湖の湖岸線は複雑に入り組み、潮汐によって水位が大きく変動する。浜名湖では海苔やうなぎといった養殖業が営まれるとともに、湖の北側ではみかんの栽培が盛んである。湖をめぐる花鳥風月や漁業・舟運の風景は、『万葉集』におさめられた作品にみるように、古くから歌に詠まれ親しまれてきた。また、関東や中京、関西の大都市圏から交通の便がよく、弁天島や舘山寺などのリゾート地が生まれた。

天竜川は長野県の諏訪湖（すわこ）を水源に、遠州灘に注ぐ大河川である。市域では、北部の天竜区域において山間地を縫うように流れ、二俣地域を境に扇状地と海岸平野が広がる下流域に至る。山間部の流域はスギやヒノキ等の森林資源が豊富であるほか、近代には鉱山や製紙工場も発達した。上流部と下流部は昭和 28 年（1953 年）に佐久間ダムが建設されるまで（完成は 1956 年）、舟運で結ばれていた。平野部では近世から綿栽培が盛んになり、織物業の隆盛から、やがて工業都市へと発達する。

市域はその標高から、南部の平野や台地を中心とした地域と北部の山間地に分けられる。住環境としては、前者は温暖なサト主体、後者は寒冷なヤマ主体の世界といえる。両地域の各所には、街道沿いにマチが形成されている。なかでも中世都市「引間（ひくま）」と異なる位置に出現した城下町「浜松」は、都市化が顕著に進み、現在は中心市街地を形成している。また、戦国時代の城下町である二俣地域は、伝統的にヤマとサトをつなぐゲートウェイ（結節点）としての役割を担っている。

図３－３　浜名湖・天竜川関連図（1:浜名湖、2:マチの風景、3:ヤマの風景、4:天竜川、5:地域の詳細）

４　東海道と姫街道がもたらす往来のにぎわい

関西と関東の中間に位置する浜松では、古くから、多くの人々や物資、情報が行き交った。列島の東西を結ぶ大動脈は、当地においては浜名湖の南岸ルートと北岸ルートに分かれており、古代から現代に至るまで、街道、鉄道、高速道路が次々に設けられている。古代における両者の分岐点は、西の三河国府（愛知県豊川市）と東の遠江国府（磐田市）である。２つの分岐点を結ぶ距離には大きな違いはなく、自然災害などの要因を背景に主要経路が移り変わった。

浜名湖南岸ルートは、古代から近世に至る東海道の経路である。国道１号、東海道本線、東海道新幹線なども並行する。古代の駅路もこの経路を採っていたとみられ、猪鼻駅や栗原駅といった駅家が設けられた。古代の敷智郡家も古代東海道に近接し、当地域の中心は中世都市「引間」から近世城下町「浜松」に受け継がれた。東西を結ぶ往来のにぎわいは、多くの交流人口を呼び込み、近代以降、都市が発展する礎となった。また、近世には、浜名湖を挟んで舞坂宿と新居宿（新居関所）が置かれたほか、浜名湖と天竜川は舟運で結ばれていた。

一方、浜名湖北岸ルートは、「姫街道」の名で知られる。この経路は、古代には二見道、近世には本坂通と呼ばれた。細江町気賀に想定される引佐郡家は古代北岸ルートの中心地であり、近世には気賀関所が設けられた。この他、姫街道の宿場としては、市野と三ヶ日がある。また、近現代、北岸ルートには、国鉄二俣線（現天竜浜名湖鉄道）や東名高速道路、新東名高速道路ができた。

浜名湖を挟む南北地域は、東西交流の舞台として栄える一方、江戸時代の領主がそれぞれ異なるなど、独自性も多く見出せる。両地域は、現在においても、舞阪町、雄踏町といった表浜名湖地域と三ヶ日町、細江町、引佐町といった奥浜名湖地域に受け継がれ、文化財の宝庫として知られている。

図３－４　上段：東海道風景（1:今切渡し舞阪渡船場、2：舞坂宿脇本陣　3:東海道の松並木）
下段：姫街道風景（4:本坂峠、5:坂一里塚、6:岩根薬師堂）

５　秋葉街道を通じた交流と信仰

秋葉街道（秋葉道）とは、秋葉山の参詣を中核として発展した遠江と奥三河、南信州を結ぶ交通路の総称である。南北交流の交通路は、秋葉山の参詣を介さない経路もあり、広くは「信州街道」、「塩の道」の名でも知られている。いずれも正式な道筋として定まっておらず、複数の経路がある。南北交流路としての秋葉街道の役割は、古くから重視されてきた。５世紀中頃に築かれた光明山古墳（天竜区、国史跡）は、秋葉街道を見下ろす立地にある。古代以降も信州と遠州の往来は盛んであり、元亀３年（1570年）、武田信玄が進めた遠江侵攻（別動隊）にも、秋葉街道が利用された。

秋葉街道の中心である秋葉山は、標高 866mの山頂付近に築かれた山岳宗教の霊場である。近世には、秋葉大権現をまつる秋葉社と、修験者三尺坊をまつる秋葉寺が併存した。秋葉大権現の利益は、武運長久が第一とされ、戦国武将達が奉納した刀剣（国重文）が伝わる。江戸時代後期以降は、火伏の効力に注目が集まり、広く民衆の信仰を集めた。江戸から秋葉山に至る参拝者は、東海道掛川宿から森町を経て秋葉山に至り、熊（天竜区）から鳳来寺（愛知県新城市）を経由して東海道御油宿（愛知県豊川市）に至る経路（三河では鳳来寺道とも呼ばれる）をとった。秋葉山に続く道沿いや集落の中には灯籠が建てられ、集落ごとに祭祀が継続されている。秋葉灯籠には、精緻な彫刻が施された鞘堂（龍燈）を伴うことも多い。

秋葉街道が貫く北遠地域は隣接する奥三河や南信州との歴史文化の共通性が高い。山里に関わる生活習慣をはじめ、正月行事の田楽、猿楽、田遊といった中世芸能を演目に持つ祭礼をはじめ、霜月行事の湯立て神楽（花祭）や盆行事の念仏踊りといった民俗芸能が広域に認められる。

北遠地域には、山住神社や春埜山といったヤマイヌ（オオカミ）信仰の中心地もある。鹿や猪といった害獣や動物にまつわる災いを遠ざけるとされたヤマイヌへの信仰は、焼畑農耕が行われた山間地で特に盛んである。信濃駒ケ根のヤマイヌ、早太郎（しっぺい太郎）は、遠江の見付（磐田市）に出向き悪霊を退治するが、信州への帰路に命を落とすという伝説がある。その墓は複数知られているが、青崩峠（天竜区、県史跡）手前の秋葉街道沿いにも、早太郎の墓といわれる祠がある。秋葉街道を通じた南北交流の痕跡といえるだろう。

図３－５　秋葉街道関連文化財（1:青崩峠、2：秋葉山常夜灯鞘堂、3:小松の秋葉大鳥居、4:秋葉神社神門、5:焼失以前の秋葉神社（絵葉書）、6:秋葉社奉納刀、7:山住神社札）

6　ものづくりに関わる新進の気風

古くから多くの交流人口を抱えた当地では、ものづくりに関わる新進の気風が育まれてきた。

古墳の表面に並べられた土製品に埴輪（はにわ）がある。埴輪の製作技法は当時の政治の中心であった近畿地方中心部から、東日本に向かって情報が伝えられた。当地では、近畿地方から発信される情報と硬質焼成陶器である須恵器（すえき）を造る技術を融合させ、独特の技法をもつ埴輪がつくられた。北区都田町にある郷ヶ平（ごうがひら）6号墳出土品はその典型である。平安時代、尾張から三河、そして市内でも生産された灰釉陶器（かいゆうとうき）は、高級品である緑釉（りょくゆう）陶器を真似た量産型陶器である。灰釉陶器生産も東海地方を中心に起こった技術革新のひとつと評価できる。吉名窯（浜北区）はその一大生産地であった。

当地にみられる技術革新は、近世から近代にかけて加速する。江戸時代中期以降、綿花（めんか）生産が行われた天竜川平野では織物（おりもの）産業が盛んになり、三河（みかわ）や和泉（いずみ）と並ぶ綿織物産の主要な生産地として発展を遂げていく。さらに、19世紀末から始まる楽器生産や輸送機器生産を盛んにした歴史をみると、積極的な技術移入と新進の気風を読み取ることができる。テレビ受像技術も当地が発祥である。時代の変化とともに、分野を超えて工業技術の発展が進み、現在、浜松は「ものづくりのまち」として、多くの世界企業を擁するようになった。

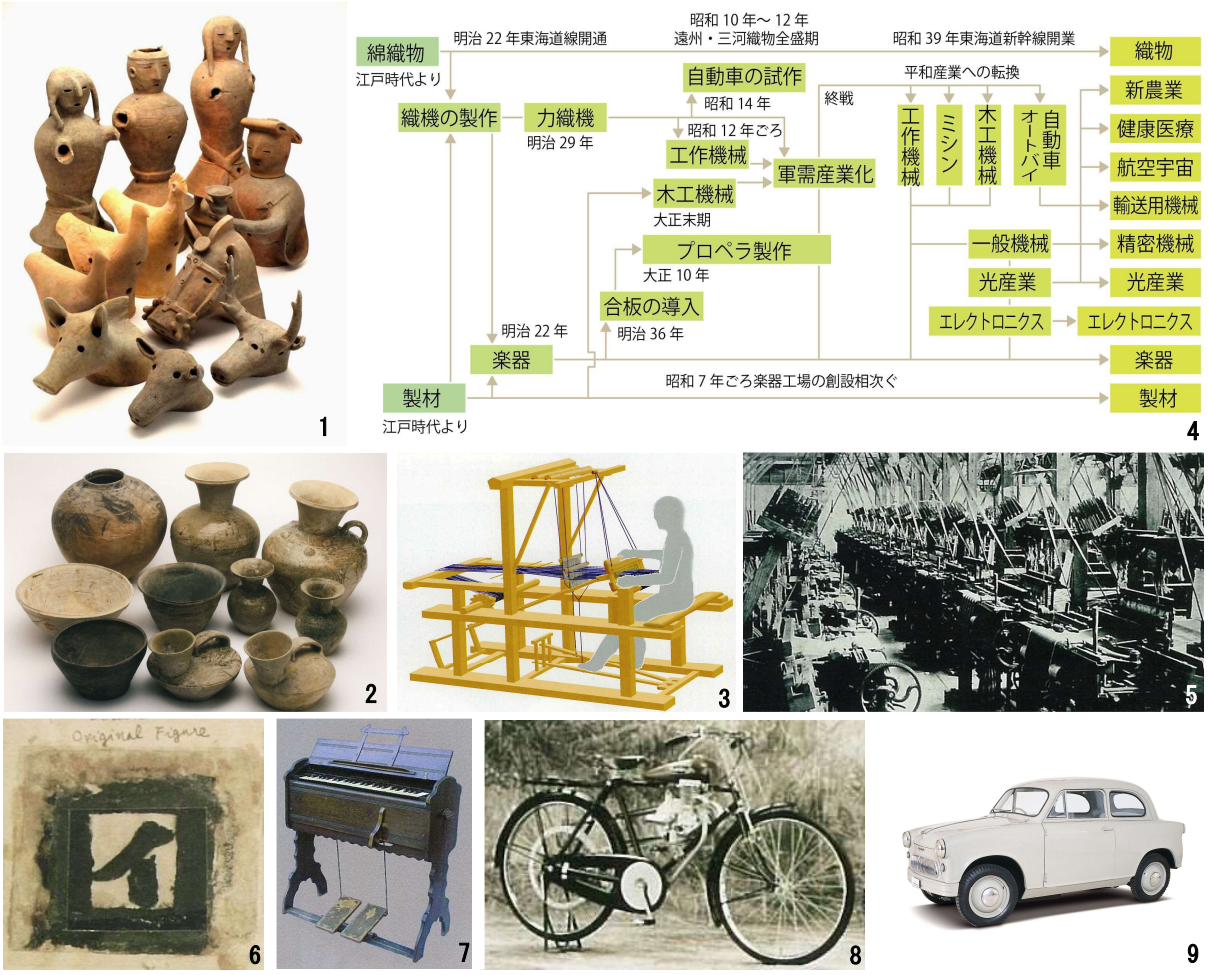

図3－6　モノづくりに関係する文化財（1:郷ヶ平6号墳出土埴輪、2:吉名窯跡出土灰釉陶器、3:遠州機見取図、4:工業生産の系譜　5:市内所在織布工場の絵葉書、6:日本で初めてテレビ画面に映された文字の雲母板、7:国産オルガン、8:エンジン付き自転車、9:日本初の軽自動車）

7　基層的信仰と多様な民俗芸能

人々の心に宿る信仰心は、カミまつりに関わる遺跡や出土品、民俗儀礼などにその系譜をたどることができる。本市では、渭伊神社境内遺跡（北区、県史跡）を代表例に祭祀遺跡や関連する出土品が多く、古代人の精神生活をうかがうことができる。鳥居松遺跡（中区）出土の弥生時代の家形土器（市有形）は、浜名惣社神明宮本殿（北区、国重文）に代表されるような神明造に通じる神殿の姿を示す。また、辺田平１号墳（浜北区）出土埴輪が示す狩猟の情景は、現代に伝わるシシウチ神事とも共通し、世俗世界と精霊世界との交流を物語る。

本市には、数多くの無形民俗文化財が知られている。元旦から１月中旬（旧暦を含む）にかけて行わる田楽、田遊系の芸能は、中世芸能の様相を色濃く残す。西浦の田楽（天竜区、国無形民俗）や遠江のひよんどりとおくない（北区及び天竜区、国無形民俗）が広く知られており、五穀豊穣を祈った予祝儀礼や、寺院行事である修正会などが組み合っている。

大念仏や放下などと呼ばれる盆行事は、戦国時代から江戸時代にかけて宗教色を帯びた念仏踊りとして発達した。滝沢の放歌踊り（北区、県無形民俗）は、愛知県新城市から伝わったとされ、三遠国境を跨ぐ交流を物語る。また、７月、８月には、同じく中世起源とされる遠州大念仏（市無形民俗）も、市内各地の祭事として広く行われている。

霜月祭りや花祭などと呼ばれる行事は、11月に行われる湯立て神楽を中心とした催事である。冬枯れの季節である11月に清めの湯立てを行うことで、新たな生命力を呼び起こすことを目的としている。この祭礼は、奥三河を中心に発達し、鬼面をつけた舞が加わることも特徴的である。本市では、川合花の舞（天竜区、県無形民俗）を代表例に、奥三河と接する天竜区の佐久間地区に集中する傾向がある。

また、江戸時代に始まった農村歌舞伎は、神仏への奉納芸能として広域に広がった。近代には、余暇を楽しむ芸能として大流行した。市内では、北区引佐町に伝わる横尾歌舞伎（県無形民俗）が代表例である。

図３－７　信仰関連遺産と民俗芸能（1:家形土器、2：浜名惣社神明宮、3：滝沢のシシウチ神事、4:鹿形埴輪、5:西浦の田楽、6:寺野のひよんどり、7:遠州大念仏、8:川合花の舞、9:横尾歌舞伎）

８　地域の成り立ちを伝える遺跡群

本市の原始古代の遺跡は、東海地方を代表するような豊富な内容を持つものが多い。以下に紹介する遺跡や出土品は、地域の成り立ちを語る上で代表的な文化財である。

蜆塚遺跡（中区、国史跡）は、縄文時代の後期から晩期（約 4,000～3,000 年前）の貝塚を伴う集落遺跡で佐鳴湖の北東、約１㎞の台地上にあり、シジミを主体とする４か所の貝塚が半径 50ｍほどの範囲に巡っている。県内では大規模な貝塚は数少なく、貴重な存在である。

弥生時代の祭器である銅鐸は、東海地方から中国・四国地方にかけて多く出土しており、本市は分布域の東限にあたる。市内全域では 19 口が知られ、浜名湖北岸域では 14 口の銅鐸が密集する（うち７口が市所蔵、県・市有形）。発掘調査によって埋納状態が確認されている事例もある（滝峯才四郎谷遺跡、北区、県史跡）。後期の銅鐸は、その形態から近畿式と三遠式に分けられるが、本市からの出土品は両者が入り混じる。銅鐸祭祀の実態と青銅器の生産と流通をうかがう上で極めて重要な資料群である。

市内には 20 基の前方後円（方）墳がある。最大例は５世紀中頃に築かれた光明山古墳（天竜区、国史跡）である。墳丘は２段に造られ、斜面には葺石が敷かれ、平坦面には埴輪を巡らす。里と山を結ぶ内陸交通の掌握者の墓とみられる。三角縁神獣鏡が出土した赤門上古墳（浜北区、県史跡）や鉄製の甲冑を副葬した千人塚古墳（東区）など、時代を通じてヤマト王権との関係が保たれていることもうかがえる。また、巨岩祭祀跡である渭伊神社境内遺跡（北区、県史跡）や渡来人の墳墓とみられる二本ヶ谷積石塚群（浜北区、県史跡）など、多様性に富んだ遺跡に恵まれている。人物や動物を象った埴輪も多く、豪族の儀式の様子を具体的に知ることができる。

伊場遺跡群は中区東伊場二丁目とその周辺にある遺跡群の総称で、古代遠江国敷智郡の郡家所在地に比定されている。伊場大溝と呼ばれる幅 20ｍ、深さ２ｍほどの小河川が遺跡群を貫いており、郡家と関連施設が大溝に沿って構築されている。大溝を中心に木簡や墨書土器などの文字資料（県有形）が大量に出土しており、地方行政の実態を知ることができる。

図３－８　主要な遺跡（1:蜆塚遺跡、2:銅鐸、3:光明山古墳（三次元陰影図）、4:伊場遺跡公園、5:伊場遺跡出土木簡）

9　徳川家康と武田信玄が対峙した攻防の舞台

浜松を代表する戦国武将といえば、徳川家康が挙げられる。桶狭間の戦い以降、三河で独立して力をつけた家康は、元亀元年（1570 年）には引間城を拡張して浜松城と改名し、天正 14 年（1586 年）に駿府に移るまでの 17 年間を浜松城主として過ごした。浜松時代の家康の初期の脅威は武田信玄であった。両者最大の衝突は、元亀 3 年（1572 年）に起こった三方ヶ原の戦いである。武田軍は、駿河と信濃から侵攻し、浜松城に迫った。野戦に誘い出した信玄の術中にはまり、家康は惨敗、浜松城に逃げ帰る。戦いの直後に信玄の健康状態が急激に悪化、翌年の行軍中に亡くなったことで、一連の軍事行動が収束するが、その後、徳川氏と武田氏の衝突は天正 10 年（1582 年）まで続く。この間、二俣城と鳥羽山城（国史跡）を舞台にした攻防戦も行われた。

本市域に勢力を持った奥山、天野、松井、大沢、井伊、浜名氏などの国人領主（国衆）をはじめ、各地の土豪は有力大名の勢力争いに翻弄され、滅亡の道を辿るものも多かった。一方、徳川家康と関係を深めた勢力は命脈を保ち、江戸時時代には、譜代大名（井伊氏）のほか、旗本（大沢氏、近藤氏）や有力庄屋（中村氏、万斛鈴木氏、田代氏）などに引き継がれる。

市内には、家康にまつわる伝承も多い。遠州大念仏（市無形民俗）は、その真偽はさておき、三方ヶ原の戦いを契機に広がったとの言い伝えがある。家康の長男信康は、織田信長に嫌疑をかけられ、二俣城で自刃した。同じ時期に殺害された正室築山殿の終焉地は、太刀洗の池（中区）として伝わっている。家康の次男秀康は、中村屋敷（西区）で誕生した。この屋敷地には 17 世紀後半に中村家住宅（国重文）が建てられた。家康の有力家臣であった井伊氏は、のちに彦根藩主に成長する。井伊氏の本貫地であった北区井伊谷には、井伊氏にまつわる文化財が豊富に伝わっている。また、近世に降るが、家康と関わった土豪ゆかりの文化財として、田代家住宅（天竜区、国登録）や万斛鈴木家屋敷（東区）なども知られている。

図 3－9 徳川家康関連図（1:家康像、2:犀ヶ崖、3:二俣城跡、4:中村家住宅、5:伝井伊共保出生井、6:三方ヶ原合戦関係図）

10　連なる古刹と寺宝

市域には、豊富な文化財を持つ真言宗寺院が多い。大福寺（北区）は、平安時代の創建と伝わる幡教寺を前身に、承元元年（1207 年）に建立された。延慶３年（1310 年）から永亨７年（1435 年）までの大福寺の記録や当時の大きな出来事を書き留めた瑠璃山年録残篇（国重文）をはじめ、金銅装笈（国重文）、絹本著色普賢十羅刹女像（国重文）を今に伝える。同じく真言宗の寺院には、摩訶耶寺（北区）に木造千手観音立像（国重文）、木造不動明王立像（国重文）、長楽寺（北区）に木造馬頭観音坐像（市有形）、岩水寺（浜北区）に木造地蔵菩薩立像（国重文）など、古い彫刻が伝わる。

中世浜松の禅宗寺院としては、方広寺（臨済宗方広寺派、北区）、龍潭寺（臨済宗妙心寺派、北区）、普済寺（曹洞宗、前身は隨縁寺、中区）、栄林寺（曹洞宗、天竜区）などが挙げられる。方広寺は度重なる大火をくぐり、室町時代中期の一間社流造柿葺の方広寺七尊菩薩堂（国重文）や、足利将軍家に重用された院吉らが観応３年（1352 年）に造像した木造釈迦如来及両脇侍像（国重文）、開祖、無文元選を描いた室町時代の絹本著色無文元選像（県有形）、本堂等計 22 件の国登録建造物等、多くの文化財を伝える。

龍潭寺には近世以来の伽藍の有様を今に伝える龍潭寺伽藍６棟（県有形）のほか、織田信長の遺品と伝わる宋版錦繍萬花谷（金沢文庫本、国重文）、近世の紙本金地著色遊楽図六曲屏風（県有形）など、戦国時代から近世にかけての文化財がのこる。

近世浜松の禅宗寺院として、黄檗宗宝林寺（北区）がある。当地を治めた旗本近藤貞用の招きに応じた明の僧、独湛が寛文４年（1664 年）に開山した。初期黄檗の伽藍配置の名残を伝える仏殿・方丈２棟（国重文）のほか、仏殿には木造釈迦如来坐像及び両脇侍像３軀、木造達磨大師座像・伝武帝倚像２軀、木造二十四善神立像 24 軀（いずれも県有形）が安置されている。

図３-10　建造物と彫刻
（1:宝林寺仏殿、2:方広寺七尊菩薩堂、3:宝林寺二十四善神像、4:摩訶耶寺千手観音立像、5:摩訶耶寺阿弥陀如来像）

11　豊富な名勝庭園

浜名湖北岸域には国や県の名勝に指定されている庭園が数多く、本市の文化財を特徴づけている。

臨済宗妙心寺派の龍潭寺（北区）は井伊氏の菩提寺であり、歴代当主の庇護を受け、数々の文化財を擁している。江戸時代前期の作と考えられる庭園（国名勝）は、「心」字形をなす池の背後に石組みで滝谷渓谷が表現される。春のサツキ、秋のドウダンなど季節ごとの変化にも富む。

大福寺（北区）は真言宗の古刹で、平安時代に築かれた幡教寺がその前身である。庭園（県名勝）は、客殿・書院の西側にある。庭園の最奥には背後の山を利用した築山があり、阿弥陀三尊が石組によって表現される。摩訶耶寺（北区）は大福寺と同じ真言宗の名刹。平安時代の創建であることが、寺宝の数々からうかがえる。庭園（県名勝）は、築山と石組みに池泉が組み合う比較的簡素なつくりである。長楽寺も真言宗の寺院であり、平安時代の創建と伝わる。江戸時代前期の作と伝わる庭園（県名勝）は北山の借景を巧みに取り込む。大小 100 本を超えるドウダンの庭として知られている。実相寺（北区）は臨済宗方広寺派に属し、江戸時代の初め金指の領主である近藤貞用が現在の地に移した。庭園（県指定）は、枯滝組、枯池など伝統的な意匠を施しており、江戸時代前期の作庭と考えられている。また、発掘調査された戦国時代の庭園として、鳥羽山城跡（天竜区、国史跡）の庭園遺構も知られる。

図３-11　市内所在の庭園
（1：龍潭寺庭園、2:鳥羽山城跡庭園遺構、3:大福寺庭園、4:実相寺庭園、5:長楽寺庭園、6:摩訶耶寺庭園）

12　都市「浜松」の成り立ちとゆくえ

浜松市は近世城下町を基盤に発達した。明治 32 年（1899 年）の町制施行、明治 44 年（1911 年）の市制施行を経て、地方都市としての歩みをはじめる。時々の行政区分を超え、経済圏は現在の市域とも重なる部分が大きい。明治時代には、天竜川や気田（けた）川流域の森林を利用した製紙工場が操業されたほか、鉄道院の工場などの誘致が行われた。三方原（みかたばら）台地においても、明治時代から茶園（百里園）の造営が始められ、開発の端緒が開かれた。民間では織布工場や染色が発展した。例えば馬込（まごめ）川（がわ）のもとの河川敷など、当時の都市郊外に規模の大きな工場が立地し、やがて大規模な繊維工場が林立するようになった。織物産業、楽器産業は明治時代から、輸送機器産業は昭和時代戦後期から発展をみせたが、いずれも本市に根差した産業は相互に関連がある技術の系譜が認められる。

戦前の浜松には、明治 40 年（1907 年）の陸軍第六十七連隊の創設以降、軍都としての性格もある。歩兵連隊は大正 14 年（1925 年）に廃止されたが、昭和３年（1928 年）には、高射砲第一連隊がその跡地に移駐した。浜松まつりの景気づけに進軍ラッパが採用されているのもその名残りとみることができる。

戦後の復興を経て、浜松はその都市の有り様を大きく変えていったが、地名や区割り、建造物、そして人々の営みなどを通じ、中世から連綿と続く都市の系譜を随所に見出すことができる。

図３-12　　都市「浜松」の歩み

（1:浜松町町制最終時、2:百里園版画、3:歩兵第六十七連隊案内、4:昭和 30 年代の市街地、5:現在の市街地）